



明治時代に関でつくられたさまざまな鍛ち物  
(うちもの)。  
小さな刃物にも日本刀の技術が息づいている  
(関市産業振興センター)。



# Steel Landscape

鉄の点景

戦前にドイツでは徹底した日本刀の研究を行い、タングステン鋼を生み出したという話が、確実な史料はないがなかば伝説のようにして伝えられている。軟鉄と鋼を鍛えあわせる独特な日本の刃物づくりの技術は、世界的にもユニークで高度な技術だった。岐阜県関市は、日本刀の一大産地として多くの名匠を輩出し、今もお刃物産業の町として国内はもとより世界へ向け刃物製品を送り出している。かつて関鍛冶を名乗ることは、鍛冶師の世界では生え抜きのエリートであることを意味したという。関に栄えた刃物文化の流れを遡ってみる。

# 名匠の技を封じ込めた鉄――

## 関の刃物

### 刀鍛冶の伝統を継ぐ地場産業

小船の舳先に吊られた篝火が暗い水面に憑いて炎が波紋と格闘を演じるそばを、しなやかな黒いいくつもの影が沈み込んで飛沫をあげて頭をもたげる。絶え間なく発せられる神がかりともとれるかけ声に、頬だけを白く浮かび上がらせたペリカン目の鳥たちは恍惚を感じているようにさえ見える。

おもしろうてやがてかなしき鶴船かな

芭蕉

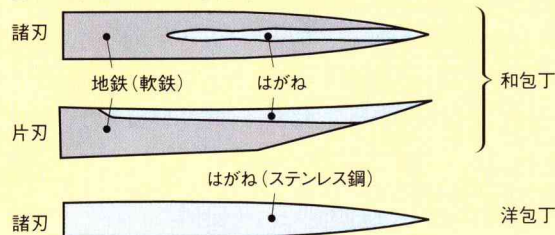
人はゆめめく炎を目の前にして、不思議な癒しの感覚を得ることがある。日本人が自然の中に「神」を感じてきた時空とは、こんな瞬間に内在しているのかもしれない。古代の漁法を継ぐ鶴匠たちが篝火を灯し続けてきた長良川河畔、関の郷。この地には、古の鶴船とともに灯し続けられてきた、もうひとつの炎があった。

金山様の神棚が見下ろす炎、鍛冶師たちが、生涯の大半の時間をともに過ごした炉の松炭火である。

古くから鍛冶の郷として多くの名匠を生んだ関。明治9年に出された「廃刀令」は、この地に集住していた刀鍛冶師たちの転向を余儀なくした。刀をやめて、生活の必需品である包丁、鋏や、鋤、鎌などの農具を打つのである。太平の江戸の頃から、刀鍛冶師たちは少しずつこうした「鍛ち物」商売へと転じていったが、明治に入ってから武士階級の消滅は刀の安定需要が途絶えることを意味していた。幾人かの起業家たちは、鍛冶師たちを束ねて、新たな刃物産業を起こしていった。こうして刀鍛冶の郷は、刃物の町へと変貌をとげていったのである。

写真の包丁、切り出し、鋏は、いずれも明治期のものだが、

■和包丁と洋包丁の違い(断面)



いわば刀匠の技と心意気が色濃く残っていた時代の「鍛ち物」だと考えられるだろう。「西のブーリンゲン、東の関」と称された名産地の刃物には、日本刀の技術が脈々と受け継がれていたのである。

やがて戦時体制とともに軍刀の生産が行われるようになった。ただしその大半は打ち抜き加工による「延べ刀」と呼ばれるもので、伝統的な鍛錬法によってつくられたものは、ごく一部だったと伝えられる。そして終戦後、日本刀づくりは全面禁止となる。やがて古来からの伝統文化を見直そうという機運のもとで、日本刀は美術刀剣として製造が再開されることになり、関市でも刀剣に関わるさまざまな工匠たちによって伝統的な手法による作刀が行われるようになった。

その一方で、関市は刃物づくりを地場産業として栄え、包丁、ナイフ類、鋏などの出荷額では、全国一を誇るまでになっていた。

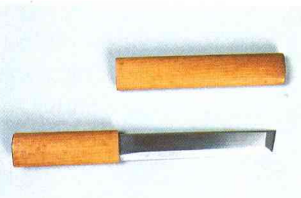
### 鎌倉時代に起源をもつ鍛冶の郷

刃物の郷の歴史は、鎌倉時代に原点があったと伝えられる。大和の国から出て九州へ渡った鍛冶師・元重もとしげ。このひとりの男が関の地へやってきて刀鍛冶を始めたのが始まりという。東山道に位置し、長良川・津保川の合流するこの地は、交通の要衝でもあり、質のよい焼刃土やいばつちや炭にする松も豊富にある。勢を増し続けていた武士たちの必需品を生産するには、まずは都合のいい土地がらだったといえよう。

同じ頃、越前の国からもう一人の刀鍛冶がやってきた。男は金重きんじゅうと名乗った。関鍛冶の本流は、この金重の末裔たちによって築かれていく。やがて室町の頃にもなると関は刀剣の一大産地に。切れ味本位の品質は広く知れわたり、「関」といえば美濃伝の刀の代名詞にもなった。当時盛んになった明との勘合貿易では関の刀が主要な輸出品目にされたほどでもあった。こうした時流の中で腕に覚えのある者たちは関をめざして移り住むようになり、やがて「千軒鍛冶屋」といわれたような刃物



戦前・戦後の頃に関でつくられたジャック・ナイフ。後年、多種のナイフ類が生産されるようになるまでは、作業用はもとより野外用、スポーツ用など国民的な万能ナイフとして随所で活躍した（井戸誠嗣氏コレクションより）。



関製の塗師屋包丁（ぬしやぼうちよう）。漆器職人が塗り道具を切り出すには必須の道具だった。職人たちの仕事は、こうしたそれぞれに独特な刃物を使いこなすことによって成り立っていた（井戸誠嗣氏コレクションより）。

のメッカが生まれていったのである。

関の鍛冶師たちは鍛冶座をつくって製造から販売までを独占した。当時の同業者組合である「座」は、貴族や寺社などの保護のもとで独占的な取り引きを行ったが、関の鍛冶座は、仲間内で自主運営されていたことが特徴だとされている。

信長がこうした排他的な「座」の支配をくつがえす楽市楽座らくいちらくざの制を設け、いわゆる市場の自由化を図ったことはよく知られているが、その信長にして関鍛冶には「鍛冶職諸役免除」の朱印状を与えて手厚く保護したという歴史がある。刀鍛冶はいわば当時の軍需産業でもあり、その高度な技術は特権的な配慮を与えても守るべきものだったのだろう。ただし当時の鍛冶師たちが経済的に恵まれていたかという、けっしてそうではなかったようである。

戦国時代はまた刀の需要が高まった時代でもあった。関で技を身につけた鍛冶師たちの中には、各地の大名に召し抱えられていく者も増えていった。優秀な技を身につけた刀鍛冶が全国に渡り、そこで関鍛冶を名乗ったことで、関の名前は鍛冶の世界では一種エリート的な響きを持つようになっていったようである。2号でご紹介した火縄銃の最初の製作者、種子島の八板金兵衛も実は関出身の刀鍛冶であったという。関というひとつの技術センターが輩出した優秀な人材が各地に波紋のように広がってゆき、鍛冶技術によって社会を底辺から支えたという構造は、興味深い。関で育まれた鍛冶の魂が、日本全国に「技」の篝火を点していった歴史がそこにはある。

〔取材協力：尾上卓生氏（岐阜県技術アドバイザー）、東京工業大学工学部・永田研究室、榎木屋、写真協力：関市産業振興センター、榎井戸正〕

## 関市産業振興センター

刃物産業の振興と関伝日本刀鍛錬技術の保存を目的に建てられた施設で、刃物の歴史や製作工程、刀剣などの常設展示が行われている。1月2日、3・4・6・7・9・11月の第1日曜日、10月の第2土日曜日（市をあげての刃物まつり期間）には、古式日本刀の公開鍛錬を見学することができる。また前庭には刃物を祭った「刃物塚」があり、使えなくなった刃物を同センター宛てに送ると供養をしてくれる（送料負担のみ）。火曜日と祭日の翌日は休館（いずれも休日のをのぞく）。

岐阜県関市南春日町9-1 TEL 0575-23-3825  
JR長良川鉄道＝刃物会館駅より徒歩5分  
名鉄美濃町線＝新関駅より徒歩15分

